

## ■第121回 み言葉の分かち合い

## ●第1朗読 イザヤ書49・3、5～6

イスラエルの民への「慰めと回復」の預言には、4つの「主の僕の歌」があり、ここは「第2の歌」に属します。イスラエルの民全体と一人のメシア「僕」について、この箇所で語られます。イスラエルは神の栄光を世に表す選民（出エジプト記19・5-6）として「神の僕」の召命を受け「わたしの僕イスラエル」と言われ、神はイスラエルを回復させようと働き、僕を通して示そうとされた言葉が「輝き」です。人に評価がされなくても、神はこの僕を信頼して、自身の計画の遂行者として「重んじ」られ、尊ばれます。僕自身の能力ではなく「神との結びつき」により、与えられた使命を果たす力が「わたしの力」だと告白します。神との靈的な回復と共同体の再建を含めて「ヤコブを御もとに立ち帰らせる」と語ります。散らされた民を、再び「神の民」にするために「集め」直し、神との契約の履行を図ります。僕は、誕生以前から神の意志と計画に基づく存在なので「母の胎にあったわたしを…形づくられた」のです。（エレミヤ1・5、詩編139篇）神は、ヤコブの12部族を立ち上がらせ、残された民を回復させると共に、イスラエルだけの回復に留まらず、闇の中にある世界の異邦人にも神の光を照らし、イスラエルから異邦人へと救いが拡大される、と語ります。バビロン捕囚・罪・死よりの解放、神との関係回復などが、ここでの「救い」です。

## ●第2朗読 1コリントへの手紙1・1～3

パウロがエフェソに滞在中（紀元54～55年頃）、コリントにある教会（使徒18章）宛に書いた手紙です。手紙の冒頭でパウロは「自分の使徒職」「教会の本質」「信仰者は既に聖とされている」ことについて語ります。復活のイエスが、異邦人への宣教のために、パウロを特別に選んだのが「神の御心」で、ソステネ（使徒18・17）は、コリントで会堂長をしており、後にキリスト者となり、パウロの協力者となります。当時のコリントは、商業都市で、多文化・多宗教、教会内は分裂状態にあり、信仰生活はまだ未成熟で、世間的な価値観の影響を強く受けたようです。神が所有する共同体で、イエスが中心となり、聖なる者たちが集い、現実の中にるのが「神の教会」イエスを自分の主と認めて信頼し、救いを求める生き方を「主の名を呼ぶ」と言います。受洗により、イエスと結ばれ、神に属する者になった信仰者全体を「聖なる者」と呼び、神が福音を広める道具となるように呼び出された人が「召された」人です。「先生」や「指導者」でもなく、復活され、今も支配しておられる主権者で、コリントの信徒だけでなく、パウロ自身もその支配の下にある方として語られているのが、ここでの「主」です。神よりの一方的な救い、資格のない者にも与えられる命が「恵み」神との和解により関係が回復され、平安が与えられて「平和」となり、これにより生まれてくるのが「安らぎ」です。

## ●福音書朗読 ヨハネ1・29～34

ユダヤ人指導者たちは、洗礼者ヨハネに「あなたは誰か」（ヨハネ1・19-28）と尋ね「私はメシアではない」と、自分の立場を明確にした翌日が、この箇所です。「神の小羊」とは、①過越の小羊（出エジプト12章）②贖罪に動物を犠牲に献げる。（レビ記4章-5章）③主の僕の歌（イザヤ53・7）のことです。ヨハネは、イエスこそ人類の罪を担いこれを取り除く方なので「神の小羊」と証言します。ヨハネはイエスより先に誕生しますが「御子によって宇宙をお造りになる」（ヘブライ人1・2）とあり、イエスは天地創造の前よりおられた方なので「わたしよりも先におられた方」と証言します。イエスがメシアであるとは知らず、彼は「この方を知らなかった」と語ります。洗礼者ヨハネの役割は、メシアが到来する準備者として、悔い改めを促し、水での洗礼を授ける旧約最後の預言者です。旧約の「油の注ぎ」は、新約では、天（父）から遣わす方。洗礼を受けるイエス（子）。鳩（聖霊）のように降りとあるので、三位一体の神が働き、聖霊がイエスに直接霊（油）を注ぎます。洗礼者ヨハネの水の洗礼は、悔い改めのしるしであり、イエスの聖霊による洗礼は、新しい命が得られ神の所属にされます。洗礼者ヨハネは、聖霊の降臨を見て、神からの言葉を聞き、神の御心を知ったので、イエスこそ「神の子」であると証言します。

【著者の一言】「子羊」弱く、無抵抗で、罪を背負って命を差し出すメシアを象徴。「鳩」平和、靈的清さ、静かで争わず、創造の開始、貧しい人々は鳩を犠牲として献げ、開かれた救いを象徴。

著者 蒲池 明憲